

ピントー「放浪記」の刊本について

駒井義明

ヨーロッパ人の東洋に関する旅行記録は数多いが、その中でもシナ及日本の兩者を述べたものとして有名なのがイタリア人マルコ・ポーロの「東方見聞録」及び此に掲げるポルトガル人フェルナン・メンデス・ピントーの「放浪記」であろう。前者は云う迄もなく元代の記述であるが、後者は明代のそれで、特に後者はマルコ・ポーロが日本に関する記事を傳聞によつて述べたのに對し、自ら見聞した所を記した處にその特異な點を見出す事が出来る。

後奈良天皇の天文十二年(西紀一五四三年)八月、シナ海賊船に便乗した三人のポルトガル人が琉球から種子島(南端)に到つたが、その中の一人は鐵砲(鳥銃)を傳えたフランシスコ・ダ・モタであり、他の二人は此に述べるフェルナン・メンデス・ピントー及びクリストフ・ホラルホであつた。

アメリカ合衆國 New Jersey 州 Princeton 市の書肆 D. Van Nostrand Co. 發行の Charles E. Nowell 氏の著書である “A History of Portugal” はポルトガル史として一讀簡明の好著と思われるが(一九五二年八月初版一九五八年九月再版)、その一一五頁から一一六頁にかけてピントーの生涯について左の様に述べている。

Fernão Mendes Pinto until recently enjoyed a reputation as

a liar and a braggart, but seems now to have been at least partly vindicated. The Mendes Pinto adventures, if authentic, surpass the probably fictitious ones which Captain John Smith claimed for himself. They began in childhood when he ran away from Lisbon and when the ship on which he sailed was captured by Moorish pirates. For their own reasons, his captors, instead of selling him in Morocco, put him ashore in Portugal. Next, at the age of 26, Mendes Pinto sailed for the East where he wandered about for the next twenty-one years. Usually making India the point of departure for his trips, he, by his own statement, visited the Red Sea, Ethiopia, Ormuz, Malacca, Sumatra, Siam, Burma, China and even Tibet and Mongolia. He was possibly a member of the first European party to set foot in Japan, and even if he was not it seems likely that he did go there ultimately. In more than one other Far Eastern place Mendes Pinto claimed to be the first European visitor. In the course of his travels he entered the Jesuit Order, which he soon left for want of vacation with the emphatic consent of his colleagues. Returning to Portugal, he gave in his Peregrination an account of the places he had visited and the sights he had seen. It is no wonder that his tale was received with some reservations, but Philip of Spain was enough impressed with Mendes Pinto to award him a pension after becoming ruler of Portugal in 1580.

上文によるとビントーは當時の人から法螺吹きと目された様であるが、晩年ポルトガルに歸つてから後、ポルトガル王兼スペイン王のフィリップから邸宅を與えられたと云うから強ちそうのつもりも思われない。これは東方見聞録で有名なマルコ・ポーロについても云われた話であるが、研究の結果、マルコ・ポーロの見聞も全てが誇大妄想的でない事が次第に證明せられつつあるのと軌を一にする云う事が出来る。

尙又上文によると、ビントーの冒険は少年時代に始り、彼がリスボンを逃れ乗船した船がムーア人の海賊に捕りモロッコに賣られる所を、年少の故か一旦ポルトガルに歸された。そして廿六歳の時、彼は再び東方に船出したが、彷徨すること廿一年と云う。その足跡は紅海・エチオピア・オルムズ・馬拉ッカ・スマトラ・シャム・ビルマ・支那・チベット・蒙古に及び、そして更にわが日本に到つた最初のヨーロッパ人の一人であると云う。

通説によるとビントーは一五一四年頃ポルトガルに生れ、一五三一年から五八年迄當時のポルトガルのアジアに於ける據點マレー半島の馬拉ッカを中心として活躍し、一五四四年（日本側記録では一五四三年）初めて日本に到り、四六年再度渡來し、その歸途アンジローと云う日本人を馬拉ッカに伴つたが、このアンジローが後年フランシス・ザビエルを東導する事になった。その後一五五一年にビントーは第三回の來日を行い、更に耶蘇會士として五三年にも來日し、後耶蘇會を脱會、遂に一五五八年に二十年振りて故國ポルトガルに戻つた。

ビントーの「放浪記」はポルトガル語の原名を *Peregrinacão* と云い、一五五八年歸國後彼ビントーが隱退の閑暇に子孫に讀ませるために書き綴つたと云われ、（但し英譯本にはスペイン王フィリップに捧ぐとある）その出版は一六一四年（初版）で、東洋（モリソン）文庫目録によるとリスボンで *Pedro Crasbeck* と云う人によつて出版された。

尙東洋文庫目録によると、スペイン譯は一六二〇年マドリッドで *Thomas Lunt* により、フランス譯は一六二八年パリで *Mathurin Henault* により、オランダ譯は一六五三年アムステルダムで *Jan Rieuwertsz* により、又イギリス譯は同じく一六五三年ロンドンで *J. Macock* により、更にドイツ譯は一六七一年アムステルダムで *Heinrich und Dietrich Boom* によつて出版された。

扱てイギリス譯は前記の通りマコックが出版したのであるが、その費用は *Henry Cripps* と *Lodowick Lloyd* が負擔し、その英譯者は *Henry Cogan* である。尙東洋文庫目録には *Arminius Vambery* の序文をつけた一八九一年ロンドン出版の英語抄譯本がある。

そして現在坊間で最もえやすいのは「放浪記」のエヴリマン叢書に収められた抄譯本であろう。此本は前記の一八九一年ロンドン出版の抄譯本に基づいた様で、抄譯者は *Fisher Unwin* である。尙エヴリマン叢書の書名は *Portuguese Voyages 1498-1663* で、その中に「放浪記」の一部が *The Furthest East 1537-58* として収められている。そして「放浪記」の内容は第廿五章から第五十六章でシナ及び我日本に關する部分のみである。

扱て私は昨夏に日ポルトガル公使館（現在は大使館）の敎示によ

り、一六一四年及び一六七八年リスボン發行の「放浪記」と現代ポルトガル語との對譯本を入手することが出来たので、これを左に紹介しよう。

この對譯本の發行者はリスボンの文化交流會と、リオ・デ・ジャネイロのブラジル學生ホーム圖書出版社の兩者であり、對譯者は、Adolfo Casais Monteiro 氏で、刊行は一九五三年である。(部数は明かでないが限定版である)

此書の体裁はクオーター版、日本流に云うと約B五倍版で假綴廿四冊で、一冊は六四頁である。標題は

Peregrinação e Cartas de Fernão Mendes Pinto

で「フェルナン・メンデス・ピントの放浪記と手紙」である。

印刷の体裁は左右兩頁對譯で、タイトル・ページに一六七八年版の原本を複寫し、又各章の冒頭は花大文字で飾り、原本の倂を出している様に思われる。

本書は二部に分け、全二百二十六章であるが、第一部は第一章から第二百二十九章まで、又第二部は百三十章からで、此部は一六一四年の初版本のタイトル・ページを具えているが、第一部は前記の様に一六七八年版のタイトル・ページである。

なお、本書の末尾廿三冊廿四冊は手紙と附録と目録であるが、附録としてはピントの旅行地圖が掲げられ、又挿入された挿繪はグラビア版廿四枚、原色版十二枚で華麗を極め、中數枚には往時の日本風俗を畫いた所謂 *diomo* 即屏風も見られる。

以上が複製されたピント「放浪記」の概要である。

向ポルトガル公使館の指教によると、リスボンの *Livraria Barreira* 書籍發行の英譯附きの「放浪記」*Peregrinações e cartas de*

Fernão Mendes Pinto があるが未だ入手に至らない。

譯注漢書刑法志

内田智雄 譯注

昭和三十三年六月

ハーバード燕京同志社東方法文化講座委員會刊

寫眞五葉 序二頁 凡例二頁

本文八六頁 索引九頁 英文序・凡例四頁

二千字たらずの當用漢字が制定され、新しい假名づかいが行われている現在、高等學校程度の教育をうけた者には、漱石の作品ですら簡單にはこなし得ないであろう。中國の古典——所謂漢文——の讀解力はもとより、故事・故實等に關する常識などにおよぶまで、甚だ心もとなない能力しか身につけることのできない現状である。こういう教育制度の現状においては、彼等に理解できるように漢文を噛みくだいてやるといふ翻譯・注釋の仕事が、専門家の仕事の中で大きな場所をしめるようになってきている。しかもその譯文は、従來行われてきたような漢文直譯体では五十歩百歩で、この目的を達したとはいひ難い。といつて口語譯にすると、どこまで意譯すべきであるかは一概に定めがたく、ここに譯者のはかり知れない苦心が存するのである。本書の譯者も「原文の語調や表現のニュアンスなどを保存しながら、できるだけ正確かつ平易な日本語とし